包炎を感染巣として敗血症を起こして死亡したと思われる症例を報告した。なお，剖検にて肝右葉に約4cm 径の肝細胞癌を合併していることが明らかとなった。

22. 胃癌の natural history について

○高杉敏彦，森山紀之，山田達哉
（国立がんセンター放射線診断部）

国立がんセンターにおいて手術された胃癌のうち，胃X線像の見なおしにより，その推移の明らかな18例について検討を行った。早期胃癌例の見なおしでは胃潰瘍瘢痕様の所見を認めたものは4例で最長5年11カ月，また，明らかな早期胃癌の所見を認めたものは5例で，最長4年2カ月であった。また，進行胃癌で，明らかな早期胃癌の所見を認めたものは9例で，最短のものは1年8カ月であった。このことから，胃癌発生から早期胃癌の状態である期間はかなり長いが，ある時期から急速な進行を示すことが考えられる。しかし，胃癌の発育進行には，癌細胞自体の性格，胃壁層の解剖学的抵抗性，更には，宿主側の免疫性が関与しており，胃癌の自然史解明には今後の研究がまたれる。

23. 血液検診における肝機能異常の検討

○福田利男，茂又真祐（塩谷病院）
管谷　仁（独協医大・第2内科）

当院における1年半（S.53年4月～S.54年9月）の血液集団検診における肝機能異常者の検討を行った。肝機能検査は MG, ALP, GOT, GPT を用いた。対象者数はS.53年度1,225名，S.54年度1,072名で，異常者は各々138名（11.3%），82名（7.7%）であった。項目別の検討では GOT, GPT が異常者の検出には鋭敏と考えられた。年齢，性別の検討では40歳代以上に異常率が高く，男性に多い傾向であった。異常者220名中，当院で精検（肝機能，ICG 等）をうけたのは91名で，うち17名に肝生検を施行。生検では脂肪肝7例と多く，慢性活動性肝炎4例であった。集検中に無症状の急性肝炎も発見された。この集検の問題点としては検査項目の選択，異常判定の基準があるが，とくに精密検査の方法については簡単に確診できる方法の必要性が大であろう。

24. ジフテリアの1死亡例

○渡辺伸宏（千葉市健康増進センター）
河目堯介，平井　昭，西本良博
（千葉市立）
小林章男（千大・検査部）

患者は17歳女子高校生。昭和52年4月11日 39.5°C の熱発，嗄声，軽度呼吸困難出現。4月13日午後3時，千葉大耳鼻科よりジフテリアの診断で千葉市立病院伝染病棟に入院。

抗血清，気管切開（気管内より長さ 10cm，径8×4mm の偽膜を摘出）等の治療にもかかわらず，Toxic Shock は改善されず，4月14日午前11時（入院後20時間後）死亡。ジフテリヤ菌は死亡2時間前に培養で確認された。

詳細は，①日本医事新報（2,799号），②千葉県医師会報（30巻，7号，35頁）に報告済み。

25. CT による悪性肝腫瘍の質的診断

○森山紀之，高杉敏彦，山田達哉
（国立がんセンター放射線診断部）

目的）CT 画像から悪性肝腫瘍の質的診断を試みた。

対象）国立がんセンター病院に於て1年6カ月間に CT 検査の行なわれた肝腫瘍186例中，CT 画像が鮮明で，臨床的に質的診断の確診された悪性肝腫瘍104例を対象とした。

方法）CT 画像を腫瘍の辺縁像と内部構造をもとにI型～V型に分類し，おのおのの型と腫瘍の質との関係を検討した。

結果）CT 像の型分類と腫瘍との関係はI型：肝細胞癌0例，転移性肝癌10例，肝内胆管癌2例，その他2例

II型：肝細胞癌1例，転移性肝癌15例，その他3例

III型：肝細胞癌47例，転移性肝癌3例

IV型：肝細胞癌12例，転移性肝癌5例

V型：肝内胆管癌3例，その他1例

結論）肝腫瘍の CT 像を，腫瘍の辺縁像と内部構造からI～V型に型分類を行なった。この型分類を使用することによって悪性肝腫瘍の質的診断を行なうことはある程度可能である。なお CT によって発見できた肝細胞癌のうち最小のものは 16mm×16mm の大きさであった。

26. 末梢動脈疾患の超音波診断

○小沢　俊（国立循環器病センター）

リニア型超音波断層装置を用い，種々の動脈疾患 120例について，末梢動脈像を検討した。腹部大動脈，腸骨動脈，大腿動脈，総頸動脈は，走行に沿い拍動を有する管として描出される。動脈硬化性病変では，血管の蛇行，内腔の不整，凹凸，後壁 echo の増強，拍動の不均等性が観察され，また血栓の有無，狭窄部位を知るのに有効であった。本検査法は，非観血的で繰返し検査が可能であり，動脈病変の診断に非常に有効であった。